



十日後の梟と猟犬

もう一度恋をするとは思わなかった。

別に前の恋人に操を立てていたつもりはない。寧ろ逆だった。

鐘淵に人生の楽しみを教えた昔の男は、もてない男を連れ歩くくらいなら金魚鉢でも持って歩いた方がましだとのたまわった。

選り好みしなければ相手に不自由しないのを幸いに、我ながらよく遊んだと思う。

その場限りの情事に虚しさを感じるほど情緒的な人間ではなかつもりだった。

どうせそのうち齢を取って、容貌が衰え、どれほど甘く誘っても誰にも相手にされなくなり、いつか独りで野垂れ死ぬ。

その日まで遊んで何が悪い？

心の命じるままに振る舞うことは罪悪ではないと自分に説いたあの男も本望だろう。

そう思っていたのに、どう考えても遊び相手には不向きな男に出逢ってしまった。

来栖の容姿が悪い訳ではない。本人は余り自覚がないらしく着るものにも持ちものにも気遣っていないのが一目で解るが、ありふれたものを無造作に着ているからこそ、身長や、均整の取れた体型が引き立っている。

そういえば、泉は初対面のとき「美味しそうな身体」と言っていた。

骨格と筋肉の陰影がくっきりとした熱い身体。味わってみれば確かにその通りだった。

見た目は全く問題ない。問題は中身。それに加えて職業だろう。

おぞましいことに警察官だ。

鐘淵は、大抵の国で警察とは相性が悪い。

日本の警察組織は世界に類を見ないほど高潔だ。道を歩いているだけで止められて賄賂を要求されることはないが、彫師という職業柄、関わると碌なことがなかった。

鐘淵自身には一切前科はないし、税金も納めているというのに、顧客に暴力団関係者がいる上に、度々ロシア・東欧諸国に出掛けているために善良な市民として扱われたことがない。

制服警官だった来栖との出逢いも、それはもう最悪だった。

あれでどうして自分が捜査に協力する気になったのか、そして協力した結果も予想通り碌でもなかったというのに、どうして来栖とつきあうことになり、そして、今、冷蔵庫にビールを冷やして待っているのか。

何がどうしてだか知らないが、俺はあいつに惚れられて絆されて、つきあうことになってんだよな？　なのに、なんで俺が待ち侘びてる？

理不尽だ。

警察官でいる限り鐘淵にタトゥーを彫って貰う訳にはいかない、と本当に辛そうに言ったので、来栖の胸に染料(ヘナ)で花模様を描いた。十日もすれば消えてしまうものだから、また来いと言った。

十日はもつからと言って、本当に十日間ほったらかされるとは思わなかった。

丁度十日目の今日、宵っ張りの鐘淵が不承不承ベッドから身体を起こす正午過ぎに電話があった。

「……よお」

『すみません、お昼時に。今大丈夫ですか？』

来栖は、寝起きの声を不機嫌と勘違いしたらしい。世間では、昼飯を食う時間だったが、鐘淵はその日の最初の食事をするのももっと遅い。

『都合が悪くなければ、今晚伺ってもいいですか？』

十日と言ったらきっかり十日経つまで電話もかけてこない上に、なんだこの他人行儀な口の利き方は。

「いつでも構わない。留守でも近所のコンビニか定食屋にいるから電話くれたらすぐに戻る」

そして、ひともしごろからずっと待ち侘びている。

……なんだ、これは。

チャイムが鳴り、ドアが開いた。

「こんばんは」

来栖が細く開けたドアから顔を覗かせた。ためらいがちに挨拶をしたのは、此処が堅気と見做されない鐘淵の住居兼スタジオで、来栖が刑事だから人目を憚って、という訳ではない。仕事でなく、プライベートな理由で訪ねることに慣れていないせいだろう。

鐘淵は無言で立ち上がり、入り口まで行ってドアを閉めて引き寄せた。

挨拶はしても構わない。けれど、久しぶりに逢ったときにはキスした後でいい。

「……ん……」

手を触れた瞬間、唇が触れ合った瞬間、舌先で唇を開かせた瞬間、僅かに身体が強張る。この前抱いたときもそうだった。

多分、拒絶したい訳ではない。今こうして長いキスをしている間も、本当に一瞬だけ戸惑った後は、服の上からでも解るほど来栖の身体は熱くなった。そして指を絡め、唇を開き年相応に上手に応える。

歳……そういえば、こいつは幾つだろう？ 最初に逢ったのが五年前で、そのとき既に制服警察官だった。

「来るのが遅い。前は鬱陶しいほど毎日通って来てたのに」

鬱陶しい……と、思わなくなったのは、いつ頃なのだろう？ ——最初からか？

「すみません、忙しくて……本当に忙しくて」

来栖は鐘淵の肩に顎を載せるようにして寄りかかったままそう言った。耳許で言われたのであれば聞き取れないような、ためいきのような囁き声だった。首筋に当たる頬も吐息も熱い。

忙しかったというのも嘘でないというのは察せられたが、それだけではない逡巡も混ざっている。

「それに、もしかしたら迷惑かもしれないと思っ……ん……！」

最後まで聞くのも嫌で、もう一度キスした。

俺が、この俺が、どれほど待ったと思っているんだ、こいつは。

「お前なら、いつ来ても迷惑じゃない」

「本当ですか？」

「ああ」

短い髪を撫でると、来栖は鐘淵の背中を抱き返して来た。

冷えたビールを差し出すと、来栖はまた戸惑ったような表情をした。

「どうした？」

「……飲めないんです」

そう言うと、来栖はもう酔っているのかと思うほど真っ赤になった。

「アレルギーか？ 酒飲むと蕁麻疹出す奴を知ってるが」

「いえ、そうじゃないんですけど」

「それなら、ほら」

プルタブを引き上げて缶を渡すと、来栖は缶を真上から凝と見つめた後、口をつけた。初めて見るものを食べる子供のような仕様に笑ってしまいそうになる。

鐘淵はもう一本ビールを出すついでに、つまみにしようと思って買って来た唐揚げを出した。

「晩飯まだだろ？」

一息入れたら、飯でも食いにいこうと誘うつもりだったが、焦らされ過ぎて待てないかもしれない。

鐘淵はベッドの縁に座る来栖の横に掛けて肩を抱いた。来栖は、また一瞬だけ身体を強張らせ、そしてゆっくりと身体を預けて来た。

顔を覗き込むと、目許も頬も耳も紅潮していた。

こいつは、こんなんで、どんな風に女とつきあっていたんだろう？

——つい、想像しそうになってしまった。

やめよう。

「来栖？」

「……み、ま……せん、大丈夫……です」

軽い呻き声を上げた。ぐらりと来栖の頭が揺れる。

来栖は鐘淵と二人きりだと本当にすぐに真っ赤になるが、今のこの顔色は尋常ではない。

「おい？」

鐘淵は、前のめりに倒れてしまいそうになる来栖の肩を支えて、自分の肩に押しつけた。

「……大……丈夫……」

首筋まで真っ赤に染まっているせいで、白いドレスシャツが更に白く見える。

鐘淵は、自分のビールを床に置き、来栖が両手で握っている缶を抜き取った。中身は半分ほど残っていて、まだ十分に冷たい。

「……弱いったって、お前、限度があるだろ。その身体で」

鐘淵よりは少し小柄だが、多分、身長は一八〇を少し超える。筋肉もしっかりついていて、鐘淵をナイフで襲った殺人犯を素手で抑え込んだ。多分、数十秒で。

「……お前、これはないだろ？ いや俺が悪いんだろうけど」

来栖は確かに飲めないと言って断った。それを更に奨めたのは鐘淵だ。

少し飲めば、触れるときの一瞬の躊躇や、緊張や、遠慮がなくなるかと思っただけのことだった。確かに、今は邪魔だと思ったそれらはない。

けれど、何もしていないうちに肩に凭れて安らかな寝息を立てられてしまった。自分が奨めたから無理をして飲んだのだと思うと怒ることも出来ない。

鐘淵は、来栖のビールに口をつけた。

こいつは、手軽に遊べる相手ではなかった。

鐘淵が触れる度に緊張するのは決して拒絶ではなく、不安と含羞だ。

それを取り除く手間を惜しもうとした罰か、これは。

鐘淵は、ビール缶から口を離し、来栖の頬にキスした。

「……大丈夫……です……」

「寄りかかってろ」

鐘淵は、来栖のネクタイの結び目に指を入れて緩めた。

忙しかったと言っていたし、ベッドに横にならせてやりたいが、少しだけこのまま凭れさせておこう。

本人は無自覚だが、無防備な来栖は色っぽい。だから今すぐにでも全部脱がせて裸にして組み敷きたい。

けれど、殆ど意識もない今この状態でそれをしようとも、よく眠っているのを揺り起こそうとも思えない。

とても不思議な気分だ。この顔は何時間見ても飽きそうにない。

――ま、いいか。

ビール一本半を空けるまで、つまみの代わりにキスしていよう。

唇だけでなく、額の生え際にも、耳にも、顎にも、首筋にも。

酔いが冷めたら少し話しよう。

手間を省かなければならないような短いつきあいにする気はないのだから。

例えば、お前は幾つなんだとか、お前の好きな食べ物はとか――そんな他愛もない、しかし重要なことをまだ知らない。

十日後の梟と猟犬

<http://p.booklog.jp/book/78813>

◆関連作品◆

[コミック「梟と猟犬」\(18禁・有料\)](#)

[君と見る一枝垂桜\(18禁・無料\)](#)

[接吻\(18禁・無料\)](#)

[雨\(無料\)](#)

[新年～С НОВЫМ ГОДОМ\(18禁・無料\)](#)

著者：伊祖子久美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/iso5kumi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78813>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78813>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ